

「借耕牛」の歴史伝承へ

高松のデザイナー
富田さん

香川の田畑を耕すため、かつて農繁期に徳島の山村から借り出され讃岐山脈を往来した借耕牛の歴史を伝え残そうと、高松市今里町のデザイナー・富田紀久子さん(77)が、約30年にわたる調査・研究成果をまとめた冊子「あわ／さぬき 借耕牛探訪記」(美巧社)を出版した。借耕牛で生計を立てたり、牛追いを仕事にしたりした当事者の証言や同市に残る牛の墓の探訪記などを収録しており、貴重な郷土史として注目されそう。

調査研究30年の成果冊子に

借耕牛は江戸時代中期から1970年まで約250年間続いた慣習。放牧地に恵まれ多くの牛を飼育していた徳島の山村農家と、労働力が不足していた香川の小規模農家が牛の貸し借り契約を結び、香川の農家は賃料として玄米を徳島の農家に支払っていた。全国各地



富田紀久子さん

に同様の慣習があったが「阿讃の借耕牛」は全国でも最大規模で、最盛期の40年ごろは年間約8500頭が讃岐山脈を越えて香川に来ていたという。

「調査から浮かび上がったのは、過酷な労働を強いられた牛たちの姿だった」と富田さん。丸々肥えていた牛は昼夜を問わない耕作で次第にやせ細り、貸主の元に帰る際は骨が浮き出た背中に重い米俵を乗せられて歩くのがやつのようだったという。

富田さんは「高齢化とともに借耕牛の記憶も風化が進んでいる。数多くの牛たちが命をかけ香川の農業を支えてきたことを大勢に知ってもらいたい」と話している。

A4判カラーの150ページ。1500部を作成し希望者に3300円で販売するほか、県内の図書館や小中学校、「コミュニティセンター」などに寄贈する。問い合わせは富田さん、電話(080)7950-3236。

「あわ／さぬき 借耕牛探訪記」

